

日本書紀卷第三 神武天皇三十一年夏四月

神武天皇^(注1)が即位されてから三十一年目の夏四月^(注2)の一日、天皇が国中をめぐられた。

そのとき、腋上の嘸間丘^(注3)にお登りになり、国の様子をご覧になって、「ああ、なんとすばらしい景色の国を得たものか。広くないとはいうけれど、蜻蛉^(注4)が連なったようなかたちではないか」とおっしゃった。この故に、はじめて秋津州^(注5)という名が生まれたのである。

昔、伊弉諾尊^(注6)がこの国を名づけて、「日本は浦安^(注7)の国、美しい戈^(注8)を備えた国、磯和上^(注9)を持つすぐれた国」とおっしゃった。

また、大己貴大神^(注10)は、この国を「玉のように美しい垣に囲まれた国」と名付けられた。饒速日命^(注11)は、天磐船に乗って大空を駆け巡り、この国を見下ろしながら天上世界から下ってきたときに、「虚空から見て下った日本の国」と言われた。

現代語訳 平成28年6月

明治大学 政治経済学部 専任講師 植田 麦

浦安村の誕生

明治に入り、11年(1878年)11月に堀江村と猫実村は連合して戸長役場を設置し、同年当代島は欠真間・新井村(現、市川市)の2カ村と連合して、戸長役場を設置した。さらに、明治17年8月には、戸長役場の所轄区域の変更が行われ、猫実・堀江・当代島の3村は連合して、猫実村ほか2カ村連合戸長役場を設置した。

明治22年4月1日、市制・町村制の施行にともない、堀江・猫実・当代島の3村は合併し、「浦安村」となった。合併時の戸数は1,040戸、人口は5,946人であった。新しい村名は、漁業が生業であったことから、漁浦の安泰を祈願する意味で、初代村長の新井甚左衛門によってつけられたといわれ、また一説には、日本国は昔「浦安の国」と称したところから、この名をつけたともいわれる。

(「浦安市史」より)

- (注1) 初代の天皇。名前は神日本磐余彦。^{かむやまといはれびこ}
- (注2) 「夏」なのに「四月」であるのは、明治時代以前の暦である陰暦では、現代とは季節がずれるため。
- (注3) 現在の奈良県御所市^{こせ}東北部。
- (注4) トンボのこと。
- (注5) 日本のこと。元々は現在の奈良県御所市の地名であったのが、大和国の呼称となり、本州をさす語となり、そして日本国を称するものとなった。
- (注6) 伊弉冉尊^{いざなみのみこと}とともにこの国を作り、多くの神を生んだ神。
- (注7) 「心安^{うらやす}」で、心が平安であること。
- (注8) この「戈」は、軍事のために用いるものではなく、伊弉諾尊が国を生むときに使ったものと考えられる。
- (注9) 石で作った祭壇のことと考えられる。
- (注10) 天皇の祖先神が天から降る前に、国を支配していた神。天皇の祖先神に国を譲った。
- (注11) 神武天皇に服属した神。天皇の祖先神とは別に、天上世界から降ってきた。